

民主主義とは何か

—安倍政権とメディア

東京新聞社会部記者

望月 衣塑子

- *映画『新聞記者』と「i」
- *表現の自由の危機
- *日韓関係悪化の引き金
- *和解の道を自ら塞ぐ
- *空洞化する記者会見
- *不誠実かつ卑劣な圧力
- *メディア対権力のありよう
- *無視された埋め立て承認の前提
- *番記者の困難な立ち位置
- *N国の立花氏の危うさ



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

安倍政権が長期化したしまして、皆さんご存じのように、メディアもいろいろ忖度をするような世の中になっております。これまで政治部の方にはいろいろ政局の話をしていただきましたけれども、政権と正面から向き合っている記者が少ないというお話を皆さんからもいろいろいただいております。

今日は、そういう意味ではテレビ等でご存じだと思いますが、正面から向き合ってこられた東京新聞の望月さんにおいでいただきました。

『新聞記者』という映画が先ごろ公開されました、ご覧になった方もおられるかもしれませんが、その原作をお書きになったのが望月さんです。そのお話も若干あるかもしれませんが

ん。そういうことで、今日は、今の政権あるいは政治権力とメディアというテーマで実体験を踏まえてお話をいただきます。

それでは望月さん、よろしくお願いたしました。（拍手）

映画『新聞記者』と「i」

望月 初めまして。東京新聞の望月と申します。普段は市民団体ですとか女性の団体の前等々で講演することが多いのですが、今日のように財界で活躍されていた先輩たちを前にやるというのは初めてのことですので、おそらく私がかれからがangan批判する安倍さん、菅さん含め、自民党の支援者の方も多いのではないかと思います。ちょっと不快にさせてしまうこと